

ダーク 成長編

バンパイヤにより、生き血を吸われ
軟肉を貪り喰われる美女達



作者 大黒達也

『ダーク（成長編）』

作者 大黒達也

ニューヨーク、マンハッタン島。深夜0時過ぎ。とあるホテルの一室から物語は始まる。若く美しい白人女が、ニューヨークの裏社会を支配する吸血鬼の餌食となる。犯され、血を啜られる女は、囹であつた。吸血鬼はCIAが仕掛けた陥穽にはまり、捕らわれの身となる。細菌学の権威である黒沢教授が、招聘され、吸血鬼の研究に乗り出す。ここまでは、冒頭部分のあらましです。本作品は「レッド・ムーン」の前作となるものです。全編にエロティックなヴァンパイアが登場しますので、ご期待下さい。

二・登場人物

黒沢くろさわ
龍一りゅういち

ヴァンパイアの超人的能力を与えられた少年。寡黙で

クールな反面、心の奥底に激情を秘めている。

黒沢 忠明

龍一の父であり、細菌学の世界的な権威。ヴァンパ

イアウイルスの分析と変種の生成に成功する。

黒沢 京子

龍一の母。熱心なクリスチャンであり美貌の持ち主。

黒沢 修

龍一の叔父。ヴァンパイアウイルスの投与を受け、末

期癌を克服する。甥の龍一を愛し、影で支え続ける。

江藤 麗子

高校の英語教師。モデルといっても通用する美貌の持

ち主。暴力団によって拉致され、陵辱の限りを受けるが、

龍一によって救い出される。

ピータ・ウルフ

ニューヨークの裏社会を支配するヴァンパイア。凄ま

じい破壊力と、邪悪な性格の持ち主。

「本編」

第一章 悪魔

千九百八十七年、ニューヨークマンハッタン島の中
央部に位置するホテルの一室。時刻は深夜〇時を少し回
ったところだ。広大なダブルベッドで男女が抱き合っ
ていた。二人とも全裸だ。ダブルベッドの背後は、大窓
となっており、漆黒のシートにダイヤをちりばめた様な
夜景が広がっていた。女は二十歳を過ぎたばかりの白人
で、整った容貌に豊かな肢体を持っていた。男は、身長
が二メートル近くある白人の大男で、長い手足と引き締
まった体躯をしていた。漆黒の黒髪を持ち、高い鷲鼻に、
鋭い光を放つ瞳を持っていた。女は、流れるような金髪
を波立てながら、男の背中に両手を回し、鋭い喘ぎ声を

あげていた。

男が、女的首筋から、盛り上がった乳房、そして下腹部へと舌先で愛撫を行った。むっちりとした太腿を押し広げ、膣に口を付けた。女の喘ぎ声がいつそう鋭くなった。

「ギャー！」

突然、女が絶叫を発し、裸身を振るわせた。男が顔を上げた。両眼は見開かれ、血のように赤い色をしていた。

口の周りには血だらけで、口元から血が滴り落ちていた。女が激痛から逃れようと、必死に身を動かしたが、男の鉤爪ががちりと腰に食い込み、逃がれることができなかった。

男が再び、血まみれの膣に口を付けた。ガブリという音を立てて、膣肉を食いちぎった。肉片とともに流れ出る鮮血を、喉に流し込んだ。女を裏返しにして、剥き卵のような白い尻に噛み付いた。柔肉を噛み裂き、鮮血を

啜った。



その時、ドアが内側に吹き飛び、M一六アサルトライフルで武装したSWAT隊員達が雪崩れ込んできた。部

屋の中は、S W A T 隊員で溢れた。部屋の中央に置かれたダブルベッドでは、瞳を噛み裂かれた白人の女が全裸姿で、痙攣していた。先ほどの男の姿は消えていた。隊員達は、皆、蒼白な顔をして銃を構え、あたりを見回していた。ひとりの隊員の頬に生暖かい液体が、天井から流れ落ちてきた。隊員が手を当てて見ると、手の平にべったりと真っ赤な血がこびり付いた。ゆっくりと天井を見上げた。他の隊員達も気配に気がつき、顔を上げた。先ほどの男が、まるで蜘蛛のように天井に張り付いていた。男と視線が合った。目はルビーのように真紅に輝いていた。男が口を開けた。長い犬歯の先から血が滴り落ちた。

「ぐわっ！」

男が獣のような咆哮を發した。隊員達が一斉に発砲した。男の体が落ちてきて、隊員のひとりに抱きついた。両腕に巨大な筋肉が盛り上がり、一瞬で隊員の背骨が砕

けた。男は、絶命した隊員を、棒切れのようにしてぐるぐる回し、発砲を続ける隊員達を次々と吹き飛ばした。

何発もの銃弾が男の身体に命中し、血煙をあげたが、男は不敵な笑みを浮かべながら、隊員の死体を回し続けた。

隊員の死体を、他の隊員目掛けて投げつけた。その部屋にいたすべての隊員達は、言い知れぬ恐怖に恐慌をきたしていた。弾装が空になってもトリガーを引き続けた。

男は、自動小銃を振上げ突進してきた隊員の顔面を、拳で突いた。グシャリという厭な音がして、後頭部から拳が突き抜けた。組み付いてきた男達を壁に叩きつけた。あつという間に、部屋にいたすべての隊員達は、死骸に変わっていた。男は、散乱する死体を踏み越え、廊下へと向かった。

ドアの外は、S W A T隊員で満ち溢れていた。元いた部屋に踵を返し、その足で大窓に突進した。強化ガラス

が粉々に砕け、男の体が宙に舞った。正面に聳え立つ高層ビルに向けての死のダイブだった。恐るべき跳躍力で、五十メートルの距離を飛んでいった。ビルの壁面から十メートルの位置で何か男の身体を包みこんだ。男は、ケプラー繊維を編みこんで作られた特製の網に捕らわれた。

第二章 誕生

アーリントン市、通称ペンタゴンと呼ばれるアメリカ国防総省庁舎内の一角。

右手にスーツケースを下げた東洋人の男が、黒服に身を包んだ長身の白人男性に付き添われ、エレベータを待っていた。男は三十代中頃に見え、中肉中背の体躯を持ち、カジュアルスーツに身を包み、チタンフレーム製の眼鏡をかけていた。庁舎内はクーラが効いているのだが、額には薄っすらと汗が滲んでいた。付き添いの白人男性

も、同様な汗をかいていた。

二人は会話を交わすことも無く、エレベータの扉をじつと見詰めていた。

チーンという音がして、エレベータが着き、扉が開いた。中は無人だった。白人の男が、地下五階のボタンを押した。

エレベータ内にも沈黙の時間が流れた。地下五階に着き、扉が開いた。目の前には、蛍光灯の明かりに照らされた廊下が、伸びていた。

「黒沢博士。残念ですが、私はここまでです。この廊下の突き当たりに階段ホールがありますので、そこを降りてください」

黒沢博士と呼ばれた東洋人が、廊下に踏み出した。振り返り、右手を差し出した。

「有難う。ジェファアソン大尉。後は私一人で行けそう
だ」

ジェファアソン大尉と呼ばれた男が、ほっとしたような表情を浮かべ、握り返した。

「幸運を祈ります」

目の前の扉が、音も無く閉じた。男は、ふっと溜息をついて、階段ホール目指して歩き始めた。目の前に、階段ホールに続く鋼鉄製の扉が現れた。鍵はかかかっていなかった。ゆつくりとノブを回した。手前に引くと音も無く開いた。広さ十畳ほどのホールがあり、その一角に階下へと続く階段が見えた。夏だというのに異様な肌寒さを感じた。部屋を横切り階段を下り始めた。十三段の階段を下りると、また十畳ほどのホールに出た。黒沢は、部屋の片隅で床に膝をつき、下を向いている男に気が付いた。男は紫色の法衣を纏い、十字架を胸のところ、両手で掴み、必死に何かを唱えていた。男の肩がわなわなと震えているのが見えた。

「気分でも悪いのですか？」

男ははつとした表情を浮かべ、黒沢の顔を見上げた。

「悪魔……。し……主よ……。失礼しました。貴方は。何方ですか？」

「日本から参りました黒沢と申します」

「貴方が、黒沢博士でしたか」

男は、溜息を吐きながら、額に浮かぶ汗を手の甲で拭き取った。

「貴方は？」

「ショージ・フォレスト神父です」

「この先にいるのですね？」

黒沢は静かに尋ねた。神父は、問いに答えるかわりに、ホール奥にある鉄製の扉をじっと見詰めた。

「それでは、また後ほど……」

呆然と扉を見詰める神父を残し、黒沢は扉を開けた。

部屋の内部には、五十口径の軍用ライフルで武装した兵士が三名と、白衣を着た二名の男達が、詰めていた。

部屋は強化ガラスで二つに仕切られており、男達は手前に控えていた。

ガラスで仕切られた奥の部屋には、ひとりの白人男が、白い拘束服を着せられ鋼鉄製の椅子に縛り付けられていた。横を向いていた男が、黒沢の方に向き直った。目と目が合った。男はニヤリと不敵な笑みを浮かべた。

「黒沢博士ですか？お待ちしていました」

白衣を着た男のひとりが立ち上がり、右手を差し出した。

「C I A V プロジェクト主任研究員のマイケル・コスギです」

「初めまして。黒沢です…」

黒沢は、ガラス壁の向こうで、椅子に縛り付けられた男から、視線をそらすことができなかった。コスギとの会話に、上の空で答えていた。

「博士。お疲れのところ申し訳ございませんが、始めて

下さい」

「名前は？」

「うるせえな。あいつ等に何度も教えてやったよ」

「君の口から聞きたい」

男は、ずるそうな視線を向けてきた。

「俺のことを知った奴は、死ぬことになる。それでもいいのか？」

「……」

「小便秘びるなよ。ジャップ」

「口の利き方に気をつけろ！」

隣でノートに記録をとっていたマイケルが、声を荒げた。

「オメエはひっこんでいろ！」

一瞬、男の瞳が真紅に燃え上がったように見えた。すぐに男は、黒沢の瞳の奥を覗き込むようにした。

「ピータ。ピータ ウルフ。あんたは？」

「黒沢忠明。今度は私の質問に答えてくれたまえ」

「どうせ、俺の身の上話がききたいんだろう？」

ピータは薄ら笑い浮かべた。

「お前、死にぞこないの一人息子がいるだろう？」

「……」

黒沢は驚いたような表情を浮かべ、コスギの方を向いた。コスギが知らないというように首を振った。

「そんな話はずまらないな」

ピータは黒沢の目を覗き込むように言った。

「アンタのカミさんは別品だな。おたつてきたぜ。顔も最高にきれいだが、オツパイやケツもそそるね。武者ぶりつきたくなったよ」

言った後で、ピータは遠くを見詰めるような目付きをした。

「お……。お前が京子のことを知っているわけがない」

「年は二十五歳か。脂がのって美味そうな年頃だぜ。身

長は百七十センチ位かな。八十七・六十・九十の美味しそうな身体をしているだろう。子供ひとり産んだようには思えないほど、あそこの締まり具合は最高だぜ」

黒沢の拳が、細かく震え始めた。ピータの想像が、なぜか、京子の特徴にピッタリと一致していた。京子は黒沢の教え子の一人であった。

六年前、自分のゼミに所属していた京子と関係を持った。黒沢は十歳も年齢差がある京子に狂おしいまでの愛情をい দিয়েしまった。最後は、周囲の反対を押し切つてのゴールインであった。京子は類まれな美貌と、知性を備え持った聡明な女だった。その時、既に京子は身ごもっていた。八か月後、一人息子の龍一を出産した。

「どうしたんですか？」

コスギが心配そうな顔で黒沢の顔を覗き込んだ。

「何？何でもない」

黒沢はハンカチで額に浮んだ汗を拭いた。

そのとき、突然、扉が開いて、先ほどの神父が、蒼白な表情をして部屋に飛び込んできた。胸の位置にしつかりと十字架を携えていた。

「悪魔め！主よ。この者の魂をお救い下さい！」

「るせんだよ。糞坊主が。オマ*コでもしている！」

フォレスト神父は、持っていた十字架を、ピータの額に押し付けた。

「や……止めろ！」

ジューっという音がして、肉が焦げるような匂いが漂った。その後、すぐに神父は、兵士達によって取り押さえられた。

「や、やりあがったな。糞坊主が。二枚目が台無しじゃねえか！」

俯いていたピータが顔を上げた。額には、十字型の醜い火傷ができていた。

「ぐわっ！」

という唸り声をあげて、鋭い牙を剥き出しにした。両眼が、真紅の光を放ち始めた。両腕の筋肉が瘤のように盛り上がり、特殊繊維で作られた拘束衣が、ミシミシと音を立てた。

「取り押さえろ。薬だ。誰か！」

その時、ピータの上半身を固定していた金属製のベルトが、大きな音を立てて、切れた。拘束衣を着たまま立ち上がった。ピータが身体を激しく揺すった。押さえつけようとした兵士二人の身体が、壁際まで吹き飛ばされた。

黒沢も衝撃で床に叩きつけられた。二、三秒、意識を失っていた。気がつくと、目の前に注射器が転がっていた。それを掴み、必死の思いで立ち上がった。目の前は、向こう向きになったピータが、今まさに拘束衣を引き裂かんとしていた。黒沢は眩暈を押さえながら、ピータの首筋に注射針を打ち込んだ。緩慢な動作でピータが

黒沢を振り放した。床に倒れこんだ黒沢は、天井が回転しているのを見ながら、意識を失った。

「博士。大丈夫ですか？」

激しい頭痛と耳鳴りがしていた。転倒した際に頭部を強打したためだろう。

「何とか。生きていますようです」

黒沢は、ベッドに横たわる自分を、心配そうな顔をして見下ろしているコスギの顔を見上げた。コスギは右手に包帯を巻いていた。

「博士のお陰で奴を食い止めることができました。皆、無事です」

「無我夢中だったもので。あれは睡眠薬ですか？」

黒沢はベッドに起き上がり、首筋を擦った。

「ええ。象でも瞬間的に眠らせるほど、強力な薬です。普通の人間ならショック死しているでしょう」

「ピータは今、何処に？」

「地下の独房で眠っていますよ」

「凄い力だ」

黒沢は遠くを見るような目つきをした。

「ええ。伝説どおりです」

「奴から聞き出した情報を教えてください」

黒沢は、コスギの顔をじつと見詰めた。二人は、別室に移った。中央に広大な会議机があり、その上にはプロジェクタが置かれていた。会議机の上には、ファイルが山積みされていた。

それから、一時間ほどコスギはこれまでの調査結果について説明を行った。

ピータの供述によると、信じられないことではあるが、生まれは千八百六十年で、今から百三十年も前のことになる。現在のピータは、どう見ても三十歳くらいにしか見えない。本名はピータ・クラーク。出生地はテキサスの片田舎であった。牧師の家に生まれ、元来は熱心なク

リスチャンであった。ピータが十五歳のとき、家族が暴徒に襲われ、ピータだけが生き残った。身寄りが無いピータは、各地を転々とし、敬虔なクリスチャンであった彼は次第に悪の道に染まっていった。三十歳になる頃には、賞金稼ぎで生計を立てていた。もちろん家族など持たなかった。

ピータ クラークなる人物は実在した。CIAは、その頃の写真を、テキサス州の資料館で入手していた。驚くべきことに、現在のピータと瓜二つであった。本人としか思えないほどに酷似していた。CIAがピータの供述から得た情報は、それですべてであった。CIAはピータの体力測定や脳波の計測も行っていった。結果は驚くべきものであった。握力は二トン。背筋力にいたっては六トンを超えていた。標準的な成人男性の五十倍以上の体力を有していた。脳波に異常は見られなかった。人間は、全力を出しているつもりであっても、百分の力は出

していない。体を守るために無意識のうちに、脳力リミッターを抑制しているからだ。

千九百六十年東京大学教育学部体育学研究室 矢部教授によつて、行われた一連の実験結果がある。被験者を電気ショックによつて直接運動神経を刺激し、そのときの反応、縮尺の度合を測定した結果、筋肉の最大の力、最大筋力を測定したものだ。その結果、親指の最大筋力は一六キログラム。平均的な男性の場合、片腕だけでも約七百キログラムの物を持ち上げられるというものであった。ところが、成人男性が持ち上げられる平均は六十五・四キログラムである。

しかし、それにしても、ピータの体力は、人間の限界を遙かに超えていた。

「再生能力はどうですか？」

コスギの話に、耳を傾けていた黒沢が、質問した。

「凄まじいほどの再生能力を有しています。銃弾やナイ

フで傷を負っても、見る間に再生します。驚異的です。現代の医学では説明できません」

コスギの目に恐怖の色が浮かんだ。コスギとは対照的に、黒沢の表情が明るくなったように見えた。

「それと、伝説にも誤りがあることを発見しました」

「というと？」

黒沢が身を乗り出すようにして言った。

「先ほど、神父が十字架で奴の額に火傷を負わせましたよね。あれは精神的なものです。奴が眠っている間に、同様のことを試したのですが、何の反応も示しませんでした。奴の生まれは一九世紀です。科学が未発達で、民衆の信仰心も厚い時代でした。奴の心は当時のままです。神を否定しながらも存在を認めているのです」

「日の光はどうですか？」

「同じです。眠っている間に、陽光を照射しましたが何の反応も示しませんでした」

「人間離れた体力と再生能力を持ち、弱点は無いと言
うわけですね」

「弱点と言えるかどうか……。伝説どおりなのは、定期
的に他者の血液が必要ということです。実際に囹捜査員
が血を吸われ、絶命しています」

「定期的？」

「二週間に約千CCです」

コスギが、額に浮かんだ汗をハンカチで拭った。

「まさにヴァンパイアそのものだ」

黒沢は、独り言のように呟いた。

「これら一連の現象は、新種のウイルスによるものと、
想定しています。貴方の協力が必要なのです。試験用に
百CCの血液サンプルをお渡しします」

コスギは懐から、ピータの血液が入った小ビンを取り
出し、黒沢に手渡した。

黒沢は手にした小ビンを、時の経つのも忘れて、見詰

め続けた。微かな悪寒を覚えていた。

「博士。奴は人の心が読めるようです」

コスギが黒沢の沈黙を打ち消すように、言った。

「……奴は知らない筈の息子や妻の特徴を知っているかのようにでした」

黒沢がコスギの目をじつと見詰めながら言った。

「奴は、それをよく我々との駆け引きに使いました。人は誰でも弱みを持っています。これは仮説ですが……。ご存知のように、思考とは脳内活動、すなわち刺激によって、脳細胞が興奮し、シナプスが収縮して情報を伝達しています。その際に微弱な電波が発生します。奴の脳がそれと同調しているのでは無いでしょうか？」

ケネディ国際空港近くにあるホテルの一室。時刻は二十時を回ったところだ。黒沢は、CIAから依頼され

たピータ・ウルフの一次調査を終え、明日、日本に帰国する予定だった。帰国した後は、依頼されたヴァン・ペア・ウイルスの研究を始めることになっていた。

ホテル一階にあるレストランで、一人の夕食を済ませていた。今は部屋に戻り、シャワーを浴びて、窓際のソファに座り、缶ビールを飲みながら航空便の離発着をぼんやりと眺めていた。

黒沢はふと、床に置いたスーツケースに視線を向けた。中には、ピータの血液が入った小ビンが収められている。それには不老不死の可能性が秘められていた。何とかしても解明しなかった。黒沢の脳裏に、小児ガンの末期にあるひとり息子の面影が浮かんだ。まだ、五歳になったばかりであった。息子のことを思うと、胸の奥が苦しくなった。目頭が熱くなるのを堪えることはできなかった。担当医からは、余命半年と聞かされていた。黒沢は、缶ビールを飲み干し、もう一度スーツケースを、じ

つと見詰めた。息子の命を救う鍵が、そこに存在した。溜息をついて、ベッドに横になった。すぐに深い眠りに落ちていった。

深夜〇時過ぎ、黒沢は、異様な雰囲気を感じ目覚めた。照明をつけ、辺りを見回したが、何も異常は無かった。

「疲れているんだな」

独り言を呟いて、首を横に振った。大量の汗に気がついた。汗まみれのバスローブを脱ぎ捨て、シャワールームに入った。頭から、シャワーを浴びた。出始めの冷水が、汗にまみれた身体に心地よかった。すぐに熱い怒涛となつて全身を叩いた。ボディソープで全身を洗い清め、シャンプーでさつぱりとした気分になった。タオルで髪を拭きながら、シャワールームから出た。

その時、背筋に悪寒が走り抜けた。誰もいない筈のベ

ツドの上に、見知らぬ若い女が座っていた。流れるような金髪に、ブルーの瞳を持った美貌の白人女だった。白いTシャツの上に薄皮のジャンパーを羽織っており、擦り切れたジーンズを穿いていた。

「今晚は」

女は、親しげな笑みを浮かべた。

「誰だ？」

黒沢は、やっと、一言だけ言うことができた。

「ピータの友達。キャサリンというの。よろしくね」

キャサリンと名乗る女の視線が、黒沢の剥き出しになった男根に絡みついた。ピータという名を聞いて、黒沢の膝が鳴り始めた。

「どうして……？」

「ピータが貴方のことを話してくれたのよ」

「まさか。奴は……」

「そうよ。豚どもに捕まっているわ。私達、離れていて

も話ができるのよ。ねえ。そんな所に、突っ立っていないで、ここに来たら」

キャサリンが、ベッドの上を軽く叩いた。黒沢は、ちらりと、出口の方を見た。突然、殺気を感じた。ベッドに座っていた筈のキャサリンが目の前に立っていた。身長は百七十センチぐらいであった。Tシャツの胸の部分が、大きく膨らんでいた。微かな香水の香りが、鼻腔をくすぐった。ごくりと生唾を飲み込んだ。

「来て」

キャサリンは黒沢の耳元で囁いた。手を引いて、ベッドの方に誘導した。黒沢は夢遊病者のように、従った。ふたりでベッドの隅に、腰かけた。キャサリンの白魚のような手が、黒沢の裸の腿を擦った。徐々に手が、股間の方に移動していった。キャサリンの甘い香りがする金髪が、頬に触った。耳たぶを口に含まれた。さらに、首筋に息を感じた。すぐに、舌で舐め回された。慄きが

全身を貫いた。黒沢の肩が震え始めた。

「私が怖いのか？」

「……」

黒沢の視線が、サイドテーブルに置かれた聖書に注がれた。素早い動作で聖書を掴み、女の前に掲げた。女の両眼がルビーの光を放ち、口元が大きく裂け、鋭い犬歯が剥き出しになった。

「ぐわっ」という唸り声をあげて、後方に退いた。

黒沢は、聖書を縦にして、戸口に向かおうとした。

「ハハハハ……」

キャサリンが腹を抱えて、笑い出した。聖書を黒沢の手から奪い取り、ジーンズを脱ぎ捨てた。下着は身に着けていなかった。陰毛が剃り落とされた、サーモンピンク色のきれいなヴァギナが見えた。キャサリンはベッドに座り、聖書を朗読しながら、自慰を始めた。白魚のような指先がクリトリスやヴァギナ這いまわっていた。そ

のまま暫く、自らを弄んだ。

「私は、ピータとは違うのよ。二十世紀の生まれなの」
呆然と立ち尽くす黒沢の手を取って、ベッドに寝かせた。皮ジャンパーとTシャツも脱ぎ捨てて全裸となった。極上のプロポジションが目の前に現れた。

妖艶な笑みを浮かべ、右手で、萎びた男根を扱き始めた。そうしながら黒沢の胸を舐め回した。

「怖がらなくていいのよ。貴方はピータの獲物だから」
胸を舐めていたキャサリンが、顔を上げて囁くように言った。柔らかく流れるような金髪が腹部を刺激した。

男根が生暖かいものに包まれた。黒沢が首をもたげると、金髪が股間の上で蠢いていた。背筋を鋭い快感が通り過ぎた。

キャサリンは、美味しそうに男根の先を、舐めていた。軽く含んだり、しゃぶったりしていた。おもむろに喉の奥に飲み込み激しい勢いで吸引した。

黒沢は無意識のうちに、喘ぎ声をあげていた。狂おしいまでの快感に我を忘れ、あつという間に絶頂に達した。キャサリンが、美味しそうに喉を鳴らした。一滴も漏らさず、啜り上げた。

「美味しいわ。貴方のミルク」

上唇についた黒沢の残滓をペロリと舐め上げ、笑みを浮かべた。再び、萎えた男根を口に含み、アヌスを指先で刺激した。暫く愛撫を続けた。再び、男根は息を吹き返した。騎上位になって、黒沢の男根を膣で包み込んだ。中は熱く、潤みきっていた。細やかな褰が、男根をきつく締め上げた。

「どうお？私のオマ＊コは？気に入った？」

顔を近付け、耳元で囁いた。そのまま、黒沢の口に吸い付き、激しい勢いで舌を絡ませてきた。先ほどの、自分の残り香を感じたが、激しいまでの快感のために、意識の外に遠のいた。キャサリンはいつそう淫らに腰をく

ねらせた。そのたびに突き抜けるような快感が背筋を走り抜けた。二度目の絶頂は間近であった。

「うっ……」という呻き声を上げながら、キャサリンの中に吐き出した。生命そのものが吸い込まれるような悪寒を感じていた。そのまま、意識が遠のいていった。

翌朝、七時ちょうどに、腕時計のアラームが鳴り出した。カーテンの隙間から覗く、日の光に目を細めながら、腕時計を探した。起き上がり、大きな伸びをした。ふと、昨夜のことを思い出した。隣に寝ている筈のキャサリンの姿は無かった。ベッドを降りて、シャワールームに向かった。鏡に自分の首筋を映しだした。他の部分も調べたが、異常は見られなかった。ほっとする一方、身体の芯から恐怖感が湧き上がってきた。暫くの間、悪寒を止めることができなかった。

六カ月後の十二月二十二日。場所は北海道札幌市。小雪が舞う繁華街には、クリスマスを間近にひかえ、ジングルベルの曲が至るところで流れていた。恋人達が肩を寄せ合うようにして、通りを歩いていた。黒沢は、H大学の付属病院にある免疫研究所で、ヴァンパイアウイルスの研究を続けていた。黒沢は、研究室の窓から、見下ろせる街の様子をぼんやりと眺めていた。

「ふー」というため息をついた。

机の上に堆く積まれた研究ノートやデスクトップ型のパソコンの合間に置かれていた赤い液体の入った小ビンを、ズボンのポケットに入れた。息子の診察の時間が、近付いていた。ワイシャツに白衣を羽織、診療道具が入った鞆を手にし、部屋を後にした。息子が待つ、小児病棟へ向かった。病室のドアを開けた。中央に置かれたベッドでは、息子の龍一が安らかな寝息を立てていた。ベッドに上体を預けるようにして、妻の京子が眠って

いた。京子は眠りながら、涙を流していた。京子のか細い肩に片手を置いた。

「あ……。貴方。御免なさい。眠っちゃったわ」

京子が目を覚まし、頬に伝わる涙を片手で拭いながら起き上がった。

「疲れているんだよ。ちゃんとしたところで寝なくては駄目だ」

黒沢は、息子の手を取り、脈を計った。青白く痩せた胸に聴診器をあてた。五歳になったばかりの一人息子は、不治の病に冒されていた。小児ガンの末期であった。薬物や放射線治療等、考えられうる治療を行ったが、効果は得られなかった。全身に転移しており、担当医からは、余命半月と言われていた。薬のせいで眠り続ける息子と、付き添いの妻を残し、部屋を後にした。その足で、最上階にある成人病棟へと向かった。エレベータを出て、すぐの場所にある個室のドアを開けた。

実の弟である黒沢修が、窓際のベッドに座り、外を眺めていた。月明かりが、幽鬼のように青白い横顔を照らし出していた。肉が落ち、痩せこけて髑髏を連想させた。修は、息子の龍一と同じく、癌に蝕まれていた。発見が遅く、治療を始めた頃には時期を逸していた。今は、全身に転移し、死を待つばかりであった。

「兄貴。月がきれいだよ」

修が、外を眺めたまま、呟くように言った。

「そうか……。具合はどうだ？」

「今夜は、楽な方だよ」

黒沢の方に、振り返りながら言った。

「ところで、兄貴。例の薬は完成したのかい？」

「……。もう少しだ。後、一歩といったところだ」

「ふーん。兄貴は慎重な性格だからな。それは、確認試験をしていないということだろうか？」

修が、黒沢の瞳の奥を覗き込むようにして言った。

「……そうだ。そのとおりだ」

少しの沈黙の後で、搾り出すように言った。

「兄貴が言っていた攻撃遺伝子の件は目処がついたのか？」

修が話題を変えた。

「ああ。何とかな」

「どうなったんだ？」

修はいつになく、執拗だった。

「……。ヴァンパイアの凶暴性や残虐性が、その遺伝子によることは話したな。当初はそれを、完全に封じ込める方法も考えていたが、途中で考えを変えた。不要な遺伝子等無いんだ。それを封じ込めれば、無気力や無関心といった性格になることが予想される。それで、活力を抑えることにした」

黒沢は一気に話した。暫く、修は俯き考え込むようにしていた。

「修。どうしたんだ？」

「兄貴。そのウイルスを俺に投与してくれないか？」

「何を言う？まだ、動物実験の段階なんだぞ！」

「どうせ。このままでは、俺は近いうちにくたばることになるんだ。俺に試してみる。安全を確認してから龍一に投与するんだ」

「……」

黒沢は、それには答えず、修の目をじっと見詰めていた。握り拳が細かく震えていた。

「それができれば……」

搾り出すように言った。

「何故、できないんだ。規則か？そんなものは忘れてしまえ！時間が無いんだ。俺も龍一にも」

暫くの間、沈黙が続いた。

「龍一は、俺の宝だ。命よりも大切なんだ……」

黒沢が呟くように言った。目頭から一滴の涙が零れ

落ちた。

「俺にも大事な甥っ子だよ」

修が静かにそう言った。黒沢の震える右手が、ポケットに入れられた。すぐに抜かれた右手には、赤い液体が入った小ビンが握られていた。

「右腕を出せ」

黒沢は、持っていた治療靴から、小さな注射器を取り出し、小ビンの液体を注入した。

「本当にいいんだな？」

黒沢が修の瞳を覗き込んだ。修は、深く頷いた。黒沢の手は、今は、震えていなかった。的確に注射針を打ち込み、改良型のヴァンパイアウイルスを注射した。

「どんな感じだ？」

「まだ、大きな変化は無い。少し、体が火照ってきたよ
うだ。兄貴、少しひとりにしてくれないか。俺は大丈夫
だから」

「そうか。何かあったら、呼んでくれ」

黒沢はひとこと言い残し部屋を後にした。

「医師！^{せんせい}修さんが……。修さんがいなくなりました」

その日の深夜、担当の看護師が息を切らせて、黒沢の研究室に飛び込んできた。黒沢は、白衣を引っつかむようにして、部屋を飛び出した。走りながら、悪寒を止めることができなかった。修の部屋の扉を乱暴に押し開けた。身を切るような寒風が吹き付けた。窓は割れ、カーテンが大きく揺らめいていた。床にはバラバラになった椅子やベッドの残骸が転がっていた。まるで嵐が通り過ぎた後のようであった。

黒沢は、ゆっくりと窓際に向かった。中天には満月が煌煌と輝いていた。窓から身体を乗り出した。三十メートル下の雪上に人が降り立った跡ができていた。そこか

ら、足跡が外へと通じる塀まで続いていた。

修は十階の窓から飛び降りたのだ。今年は小雪で、積雪は三十センチほどであった。雪のクッションがあるからといって、通常の間人ならば、命に関わるほどの高さである。

二日後の十二月二十四日。クリスマスイブの午後八時過ぎ、街はホワトイルミーネーションの輝きとジングルベルの調で満ち溢れていた。真綿のような粉雪が夜空を乱舞していた。その頃、黒沢と妻の京子は龍一の病室に詰めていた。病変が起きていた。心拍数が落ち、脈拍も弱くなっていた。五歳を過ぎたばかりの命が、今まさに消えかかろうとしていた。

京子は、やつれた表情で、眠り続ける龍一の右手を握りしめていた。祈りを必死に唱えていた。京子は敬謙な

るクリスチャンであった。

黒沢は、動揺していた。懐には、新型ヴァンパイアウイルスを入れた容器が入っていた。時間が無かった。投与が遅ければ、遅いほど、人体への負荷は高まる筈であった。

「兄貴。何やってるんだ！」

不意に、背後から修の声が聞こえてきた。

「何処に行ってたんだ！」

黒沢が振り返った。そこに別人のような修が、立っていた。いや、病に冒される前と言った方が適当だろう。

顔は気色が良く、瞳は力強さに満ちていた。黒色のズボンと皮のジャケットを着ていた。

「俺のことはいい！早くしろ。兄貴がやらないのなら俺がやるぞ」

修は、黒沢を押しつけようと、肩に手をかけてきた。凄まじい握力だった。肩の骨が軋むのを感じた。

「……止めろ。修。龍一は俺の息子だ」

何とか、それだけ言うことができた。修は、不敵な笑いを浮かべ、壁際にさがった。壁に上体を凭せ掛け、両腕を胸のところで組み、静かに目を閉じた。

「京子……」

黒沢は、ベッドの側で、祈りを続ける京子の肩に手をかけた。京子は修が来ていることにも気が付いていないようだ。

「京子。俺は決めた。龍一に新薬を試してみる」

京子には、ヴァンパイアウイルスのことを秘密にしていた。

「新薬？」

京子が、涙に濡れた顔を向けた。微かだが、瞳の奥底に光が見えた。

「そうだ。責任は俺が持つ。龍一を死なせはしない」

京子は、目を閉じ、すぐに大きく見開いた。そして何

度も大きく頷いた。黒沢は、懐から、赤色をした新型ヴァンパイアウイルスが入った小ビンを取り出し、中身を注射器で吸い出した。

龍一の寝顔は、痩せてはいるが、天使のように美しく清らかだった。龍一は未熟児で生まれた。黒沢は逞しく生きて欲しいという願いを込めて龍の一字を使い命名した。龍一との短い五年間の思い出が走馬灯のように、脳裏を流れすぎた。耳元に京子の祈りが聞こえていた。黒沢は龍一のか細い腕を取った。注射針をゆつくりと差し込んだ。中身が静かに龍一の中に注ぎこまれていった。

「神様！我が子をお救いください」

祈りを続ける京子の手を握り締めた。窓から煌煌と輝く、満月の光が差し込んでいた。

第三章 龍一

十三年後の北海道、根釧原野の一角。朝靄を切り裂くように、中天からきらめくような陽光が降り注いでいた。

トドワラやナナワラの針葉樹が繁茂し、合間に白樺が点在する広大な森に、二サイクルエンジン音が、響き渡った。

一台のモトクロスタイプの中型バイクが、時速五十キロ以上で樹間を縫うようにできた獣道を疾走していた。

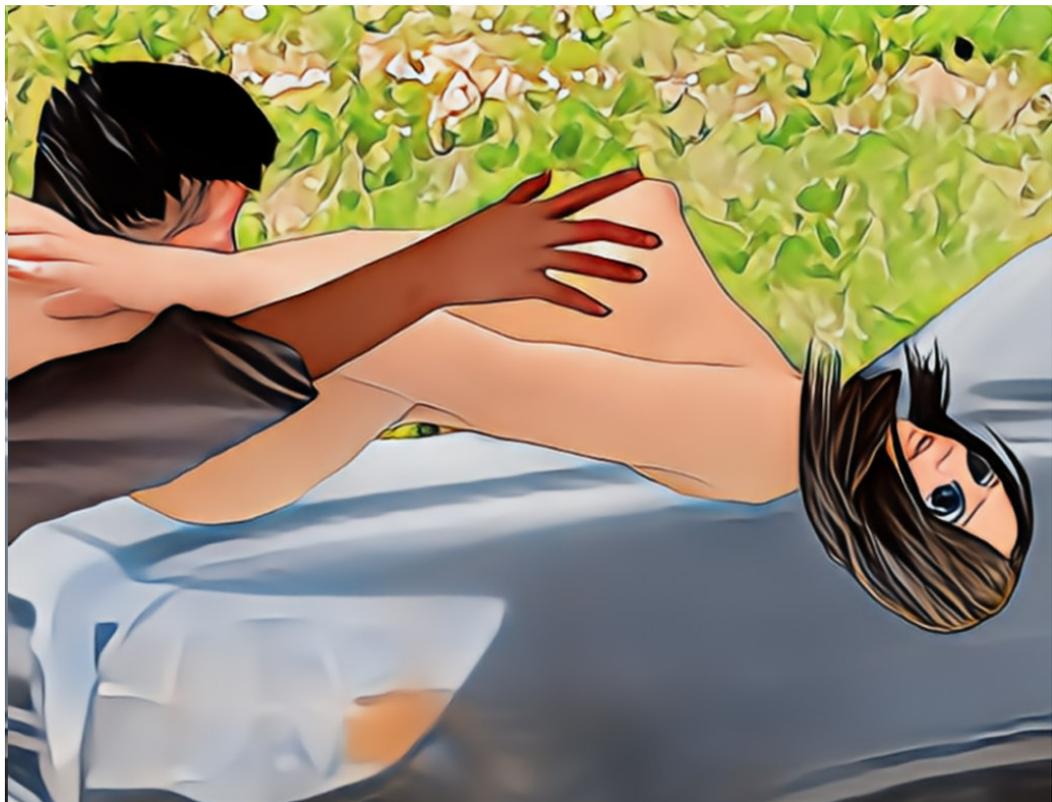
バイクには、半そでシャツにジーンズを穿いた荒削りで逞しい顔つきの少年が跨っていた。少年は、まるで奇跡のように、四方八方から突き出してくる枝をかわしていた。

急に樹海が消えた。前方に深い溪谷が見えた。少年はスロットルを全開にした。バイクが少年もろとも崖から飛び出していく、三十メートル先の対岸に着地した。何事も無かったかのように、そのままバイクを走らせた。

それから暫くの間、はるかかなたまで続く牧草地の合間に造られた農道を、土煙をあげながら疾走した。

前方に一台のピックアップトラックと、黒塗りのベンツが停車しているのが見えた。トラックのバンパー部分に、若い女が全裸にされて男二人に取り押さえられていた。少年は、スロットルを緩め、バイクの速度を落とすた。

「兄貴。こいつは最高のタマですよね！」



トラックの近くに立ち、まだ十八歳を過ぎたばかりに見えるニキビ面の少年が、背中に竜の彫り物があるヤクザ風の男に声をかけた。三十代半ばに見える屈強な体付きをした男は、トラックのバンパーに、全裸の若い女を横たえ、その股間を美味しそうに舐め回していた。

「ああ。こない女は初めてだ。シャブ付けにして、ススキノに売り飛ばしたらいい金になる」

男は、愛液に塗れた顔を上げた。

「兄貴。後生だから俺にも味見させて下さいよ」

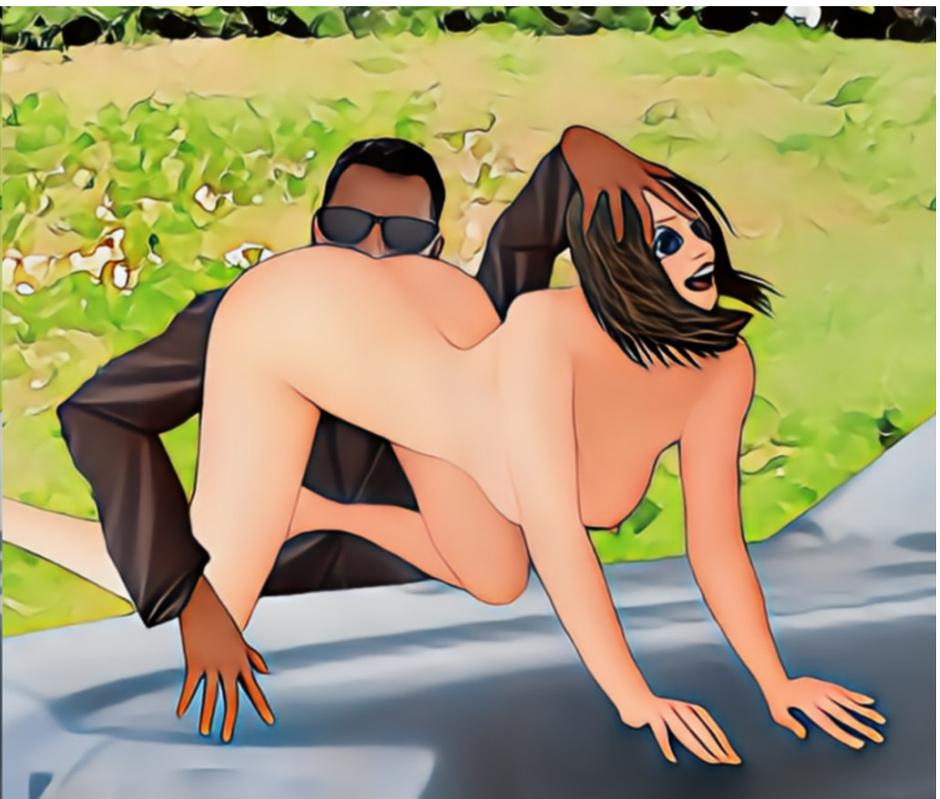
「ナマイきな口を叩くな！……まあ。今日は特別に抱かせてやるか」

「本当ですか！」

少年は、男に膺を舐め回されている女の顔を、見つめた。女は、泣きはらした顔で、呆然とした表情をして、見るとは無しに晴れ渡った青空を眺めていた。まだ、二十代の前半に見えた。切れ長で美しい二重脣を持ち、鼻

筋がきれいに通っていた。乳房は寝ていても崩れないほど、豊かで張りがあった。身長も百七十センチ近くはあるだろうか。腰の張りも十分であった。

男が女をうつ伏せに寝かし直した。目の前にしみ一つ無く、剥き卵のように白い尻が現れた。



「見ろよ。このケツ。極上の代物だぜ」

ふたりは、思わず生唾を飲み込んだ。男は深い尻の合

49 間に顔を入れて、アヌスを舐め回した。

「ああ……」

女が、男の巧みで執拗な愛撫に、喘ぎ声を上げた。暫くアヌスを味わった後で、亀頭部分に真珠を埋め込んだ。禍々しい感じのする男根を、膣にあてがい突き込んだ。

「止めて！ああ……」

女が背筋を仰け反らせた。

「くっ……。締め付けやがるぜ」

熱い膣全体が、亀頭を包み込み締め上げた。男は、満足げな表情を浮かべ、激しく腰を前後させながら、重たげな乳房を驚掴みにして振じ上げた。

「うっ……」

乳房を捻り切られるような激痛のために、呻き声を上げ、身悶えした。その時、遠くから、二サイクルエンジンが発する甲高い音が聞こえてきた。ニキビ面の少年が、女の肢体に注いでいた視線を反らした。百メートルくらいのところをこちらに向かってくるバイクを確認した。

「龍一……」

少年の瞳が大きく見開かれた。直前まで、女の悶える姿に紅潮していた顔が一瞬で青白くなった。

「兄貴！やばいよ。龍一が来た」

「うるせえな」

男は気だるそうに、顔を上げた。瞳の中に放ったばかりであった。

「なんだ。お前と同じ小僧じゃないか」

そう言いながら、萎えた男根を女の顔に擦り付け、最後には強引に開かせた口に押し込んだ。

「傷を付けたら、ぶっ殺すからな」

その時、バイクはすぐ近くまで来ていた。エンジンのけたたましい音が消えた。

「うせろ」

慶介が龍一と呼んだ少年は、二人に向かって吐き棄てるように言った。

「何だと。もういつペン言ってみやがれ！」

男がドスの効いた声をはりあげ、バイクに跨った龍一を睨み付けた。龍一がバイクから下り立つた。背が高い。百八十センチは軽く超えているように見えた。手足が長く均整が取れた体付きをしていた。Tシャツの襟元から見える胸板や二の腕には、無駄の無い強靱な筋肉が付いていた。

「慶介。そいつを始末しろ」

男に慶介と呼ばれた少年は、龍一の方を向いたまま、呆然と立ち尽くしていた。上背は、龍一と同じくらいだが、かなり肥満していた。脂肪がついた肩先が大きく震えていた。

「兄貴。こ……こ……いつはヤバイんですよ」

「ごちゃごちゃ言っていないで、早くしろ！組に入りたくないのか？」

少年は、蒼白な顔で、男の目をじっと見詰めた。そし

て龍一の方に向き直った。右手には、刃渡り二十センチのハンティングナイフが握られていた。

ふらふらとした足取りで、龍一に突き掛けた。対する龍一は右手を動かしたただけであった。ハンティングナイフのブレードを右手で掴み、簡単に取り上げた。慶介の目の前で、両手を使い、ブレードを真二つにした。鋼鉄製のブレードを表情ひとつかえず、両断する龍一は常人では無かった。

再び、慶介が討って出た。渾身の力をこめた右ストレートを龍一の顎に放った。龍一はまともに受けた。一瞬間を傾けただけであった。表情ひとつかえず、右手で慶介の首を掴み、宙に吊り上げた。そのまま、茂みに向かって放り投げた。どさりという音がして、慶介は地面に横たわったまま動かなくなった。

「糞餓鬼が！いい気になりやがって」

男の手には、黒光りするトカレフが握られていた。体

重百キロを超える慶介を軽々とあしらう龍一に畏怖の念を覚えていた。龍一はトカレフなど目に入らないかのように、男に向かって歩き出した。

「野郎。死にているのか！」

低く鈍い銃声がして、龍一の腹部に血煙があがった。

「うっ……」

龍一は、鈍痛がする腹を右手で抑えた。その手を顔の前に持って来た。真っ赤な血が、手の平を覆っていた。

「外道が！」

龍一の両眼が真っ赤に燃え上がった。男は、トカレフで撃たれても倒れない龍一に向かって再び狙いを付けた。その瞬間、龍一の姿が掻き消えた。一瞬の後、男の背後に現れた。常人の目では追いきれない速さで移動したのだ。

無造作な感じで、男の拳銃を持つ手を掴んだ。ボキリという音がして、男の腕があらぬ方角を向いた。

「ギャー！」

腕を折られた激痛に、絶叫する男のもう一方の腕も叩き折った。まるで檻ぼろを扱うように地面に転がした。

「当然、自分の手で飯は食えないな」

地面で身悶えし、呻き声をあげる男に向かって冷たく言い放った。龍一は、ピックアップトラックの方を振り返った。全裸の女が地面に蹲り、龍一の方を見ていた。静かな歩調で女に近付いた。

「嫌！来ないで」

女が恐怖に満ちた表情を浮かべ、叫んだ。

「俺は何もしない」

龍一は立ちどまり、宥めすかすように言った。瞳の奥をじっと見詰めた。龍一の澄んだ瞳が女の警戒感を、急速に和らげていった。再び、女の方に歩き始めた。

「一人で立てるか？」

「こ……腰が抜けちゃって」

女は震える声でやっと一言だけいった。龍一は女の顔を見つめた。これまで会った中で、最高に美しい女であった。腰を屈め、女を抱き上げた。柔らかく絹のように滑らかな肌を持っていた。血の匂いがした。一瞬、龍一の全身が硬直した。

「怪我をしているのか？」

「たいしたこと無いわ」

女の美しい太腿に、噛み傷ができており、血が滲み出していた。龍一の視線がその傷に釘付けとなった。ごくりと生唾を飲み込み、やっとの思いで視線を反らせた。女をトラックの助手席に乗せ、地面に落ちていた女の物と思われるジャンパーを掛けてやった。

トラックの荷台には、家財道具が何点か納められていた。龍一は、車体重量百キロはあるバイクを、軽々と持ち上げ、空きスペースに収め、ロープで固定した。運転席に座り、トラックを発進させた。ヤクザ者の男と、慶

介の二人は、地面に横たわったままであった。男は苦痛にのた打ち回り、慶介は失神から覚めていなかった。

「怪我をしているの？さつき、確か撃たれたわよね」

助手席に座っていた女が、はっとした表情を浮かべ、

龍一の血塗れの腹部を見詰めた。

「大したことはないよ」

「見せて！」

女は、身を乗り出して、龍一のTシャツを捲り上げた。

「……何？」

女は目をまるくして、龍一の腹部を見詰めた。身にかけていたジャンパーが、落ちて全裸になったのにも気付かなかった。傷はあった。しかし、すでに塞がりかけていた。女はレイプに対する恐怖心から、まだ意識が完全に回復しておらず、正常な判断ができなかった。

「だから。大したことないと言っただろう」

龍一は淡々とした表情で、運転を続けた。

「貴方のお蔭で助かったわ」

「災難だったな」

「道が分からなくなって、通りすがりのベントに乗って
いた男に尋ねたらこの始末よ」

「どこから来たの？」

「札幌から。私こう見えても教師なのよ」

「ふーん。そうなんだ」

「貴方。名前は？あつ……。私は麗子。江藤麗子という
の」

「俺は龍一。黒沢龍一です。よろしく」

それから、会話は途絶えた。麗子は、高校生ぐらいに
見える若者に不思議な魅力を感じていた。レイプされた
屈辱や痛みは、次第に和らいでいった。

二人を乗せたピックアップトラックは、広大な牧草地
帯につられた農道を爆走して行った。二十分ほどで、深
い森に囲まれた一軒家に到着した。家は、洋風の造りで

建坪は六十坪ほどであった。黒沢医院という縦看板が目
に付いた。前庭には数台の乗用車が止まっていた。龍一
は、ピックアップトラックを裏庭に止めた。麗子を片腕
で抱き上げ、裏の入り口から中に入った。

「どうしたの？龍ちゃん」

グラマーで、美しい顔立ちをした二十歳くらいの看護
師が、龍一を呼び止めた。

「この人。怪我をしているんだ。親父に診てもらいたい」
看護師は、龍一の腕に抱かれている女を見詰めた。ジ
ヤンパーを羽織っているが、その下は何も身につけてい
ないようだ。歳の頃は自分と同じくらいであった。この
辺では見ない顔だ。モデルといっても通用する容貌に好
奇心を覚えた。

「龍ちゃんの彼女？」

看護師は、茶目つ気な笑顔を龍一に向けた。

「いえ。危ないところを助けてくれたんですよ。遅れま

でしたが、私。江藤麗子と申します。教師をしております」
「済みません。冗談を言って。私は、看護師兼事務員の
桜井陽子です。龍ちゃん。江藤さんを診察室にご案内し
て」

診察室では、龍一の父である黒沢忠明がカルテに、患者の病状を記録していた。オールバックにまとめた髪には、白髪が散見された。五十代に手が届く年代になっている筈だが、年齢よりは若く見えた。

「医師（せんせい）。急患です」

看護師の陽子が、勢いよくドアを開けた。龍一が無言で、入ってきて、麗子を診察台に寝かせた。

「どうしたんだ？」

ジャンパーからはみ出した麗子の長い素足を見ながら言った。

「ヤクザ者に犯られたんだ」

「警察には届けたのか？」

「訴えるつもりはありません」

麗子が身を起こし、黒沢の方を向いた。ジャンパーが
ずり落ち、豊かな乳房が零れ落ちた。

「龍一。お前は外に出ていなさい。そうだ。修が来ているよ」

「叔父さんが来ているのか」

独り言のように言って、龍一は診察室を後にした。

病院の裏にある白樺林に、龍一と叔父の修が十メートルの距離を置き、対峙していた。澄み渡る青空の下、白樺の梢が風に揺れていた。カッコウの鳴き声が、遠くから聞こえていた。差し渡し五十センチ以上ある角を生やしたエゾシカが、二人の合間を通り抜けた。その瞬間、二人の姿が掻き消えた。白樺の梢がざわめいた。龍一と修の身体が、樹上でぶつかり合った。修が、枝からジャ

ンプしながら、龍一の顔面に回し蹴りを放った。龍一は後方に仰け反り、それを交わした。修の回し蹴りが、白樺の枝に炸裂した。鈍い音がして、五センチの太さがある枝が折れた。龍一は仰け反りながら、修の足首を蹴りで薙いだ。足首を蹴られ、バランスを失った修に、龍一は猛禽のように襲い掛かった。

落下しながら顔面をガードする修の胸に、龍一の爪先が突き刺さった。修は放物線を描きながら落下して、白樺の大木の根元に激突した。そのまま、地面に、うつ伏せに横たわり動かなくなった。龍一は、慎重な足取りで近付いた。この叔父は信用ならなかった。恐る恐る叔父をひっくり返してみた。

「俺の負けだ。けどな、師匠である叔父さんの肋骨を折るか。普通」

修は胸を抑えながら、苦笑いをした。

「折れたの？」

「何。大したこと無いさ」

修は、胸ポケットから、赤い液体の入った小ビンを取り出し、喉に流し込んだ。

龍一と修は、白樺林の奥に流れる清流の川岸で、流木に腰掛、流れを見ていた。三十センチぐらいの、小岩が敷かれた川底に水草が揺らめいていた。

「負け惜しみと違って、聞いてくれ」

「何？」

「お前は強くなった。たぶん、この世界では俺が知る限り最強だ。ただし、素手でだ」

「銃のことを言っているの？」

「お前は経験済みのようだな。シャツに開いた穴はヤクザの仕業か？」

「大したこと無かったよ。ちよつと痛いくらいだ」

龍一は、腹を撫でた。

「トカレフか？対人用としては強力な銃だ。だがな、俺が言っているのはもっと強力な銃だ」

「四五四カスールとか？」

隆一が修の方を向いた。

「詳しいんだな」

修は笑顔を見せた。

「昔、モデルガンが好きだった」

流れに視線を戻し、小石を投げながら言った。

「アメリカの話だが、種族で、気印の拳銃使いがいると、いうことを聞いた。そいつは種族を相手にするときには、スタームルガー四五四カスールを使うそうだ。弾丸は特殊炸薬入りで、グリズリーでも一発で仕留めると言う」

「ここは日本だよ。俺には関係ないな」

「そいつとお前の親父は十年前に会っている」

修は唐突にそう言った。

「……………」

「そいつの血のお蔭で、俺達はこうして生きていられるのや」

「……………」

「奴は、兄さんに言ったそうだ。自分の秘密を知った者は必ず殺すと……。こいつは、宿命かも知れん」

最後は呟くように言った。

その日の夜、澄み渡った夜空に満点の星が、光り輝いていた。裏庭に、キャンピングチェアとテーブルが置かれ、カンデラの明かりの中、黒沢が、炭火をおこしていた。椅子には、龍一と修が座り、満点の星空を眺めたり、雑談を交わしたりしていた。

裏口が開けられ、龍一の母 京子が、肉や、エビやホタテ等の魚介類やトウモロコシ等の野菜類をトレイに

載せて運んできた。

「龍ちゃん。修さんにビールをついであげてね」

「義姉さん。いつまでも若いね」

修が眩しそうな視線を向けた。京子は、今年三十七歳になる筈であったが、二十代といってもおかしくは無かった。

「お世辞が上手くなったわね。修さんこそ、全然かわらないわね。私より若く見えるわ」

修も今年で、四十三歳になるが、京子の言うとおり、十三年前と少しもかわらなかった。

「炭がおきたぞ。龍一。好きなものを焼いて食べなさい」
黒沢が、龍一の方を振り返った。

「おっ……。タラバじゃないか。焼きカニは好物なんだ。龍一ひとつ焼いてくれ」

修が、身を乗り出して、テーブルに置かれた魚介類の皿を覗きこむように言った。龍一は立ち上がり、夕

ラバとホタテ貝を、網火の上に載せた。ホタテ貝は京子の好物であった。忠明が、冷えた缶ビールを手にして、修の隣の椅子に座った。京子は忠明の隣に座った。

「久しぶりだな。四人で食事をするのは」

「ああ。一年ぶりぐらいだ」

「どこに行っていたんだ？」

「南米。アマゾンの奥地、その他色々、未開といわれる土地を回っていた」

「アマゾンですって！」

京子が驚きの声を上げた。

「あそこは、ひどかったな。人食いナマズというのがいてね。インディオ女のあそこから中に入り込み、腹の中を食べちゃうんだ」

「あそこって？」

京子が、真面目な顔で尋ねた。

「ご、ごほん……。お前は大丈夫だったのか？」

黒沢が、京子をさえぎるようにして、咳払いをしながら聞いた。

「やられたさ。水浴びしていたら、後ろの穴から入ってきやがって、気色悪かったよ」

「お腹の中は無事だったの？」

京子が、修に缶ビールを渡しながら聞いた。

「少しは食われたさ。大したこと無かったけどね」

「まあ……」

京子は、びっくりしたように瞳を見開いた。

「しかし。北海道はいいな。こんな美味しい物が食えるんだから」

修は焼きたての焼きカニに齧り付いた。芳醇な塩の香りが口内に満ちた。

「患者さんにね。羅臼や網走の漁師さんがいて、よく持つて来てくれるのよ」

「へえ。そいつは羨ましいな。兄貴は名医だし、患者に

は優しいからな」

「そんなに煽てるなよ。何も出ないぞ。そうだ、龍一。叔父さんにワインを注いであげなさい」

山海の珍味やアルコールを楽しみながら、四人は夜が更けるまで、話続けた。

龍一は、会話には直接参加せず、肉や野菜を食べ、ウーロン茶を飲みながら大人達の会話に耳を傾けていた。

そのうち京子と龍一が、家に戻った。

忠明と、修は消えかかった炭火を見詰めながら、ワイングラスを傾けていた。

「兄さん。龍一の成長は止まったのか？」

「いや。今の所は正常だよ」

「種族の男に聞いたんだが、ヴァンパイアは、成人になるまでは、人間と同じような速度で成長するということだ。肉体が最盛期を迎える頃に、成長は緩やかになり、見た目には止まってしまふ。俺の場合は、とつくにその

時期を過ぎていたからな」

「そろそろということか？どれくらい生きられるんだ」

「これも聞いた話だが、長老と呼ばれる男がいてね。彼は千年前に生まれたそうさ。死期が近いと言われている」

「千年か……」

忠明は、満点に輝く星空を見上げた。

第四章 新任教師

「おはよう。今日から、この教室の担当をして下さる江藤麗子先生だ」

教壇には学務主任の広沢慶介と、紹介された新任教師が立っていた。

男子生徒全員の熱い視線が、麗子のモデルのような美貌や、ミニスカートから伸びた太腿、それに胸の隆起に

集中した。反対に女子生徒の大半が、冷ややかな視線を送っていた。

「江藤麗子と言います。英語が専門です。馴れないので、皆さんに迷惑を掛けるかも知れませんが、一生懸命頑張りますのでよろしくお願いします」

男子生徒の中から、囁し立てるように口笛が鳴らされた。女子生徒の何人かが、散発的な拍手を送った。学務主任の広沢が去り、麗子が授業を開始した。

開始早々、皆にテスト用紙を配った。

とたんに、ブーイングの嵐が巻き起こった。

「最初からテストだなんて。信じられない！」

女子の中で最も長けの短いスカートを穿いた生徒が、挑発するように麗子を睨み付けた。

「テストと言っても、これは成績には影響しません。皆さんがどの程度、英語を理解しているか参考にしたいの

よ」

何とか試験は開始された。麗子は、シャープペンを忙しそうに動かす生徒達を見回った。後ろの方には、いかにもツツパリといった感じの生徒達が、座っていた。学生服の前をはだけ、趣味の悪いシャツをだらしなさそうに着ていた。

スキンヘッドにしている生徒もいた。

麗子が通り過ぎた時、背後に屈みこんで、ミニスカートの中を覗き込んだり、尻に顔を近づけたりした。その度に、生徒達の間忍び笑いが広がった。

麗子は気付かぬ振りを決め込んでいた。高校生の男子生徒が自分の身体に、どういった気持ちを抱くかは、理解できた。

試験は三十分ほどで終了した。試験用紙を回収し終わる頃に、校庭の方から、二サイクルエンジン音が聞こえてきた。

「龍一だ！」

窓際に座っていた生徒が叫んだ。女子生徒の多くが、立ち上がり窓の外を見詰めた。後ろに座っていた五人の男子生徒が、一斉に立ち上がった。その中で身長が百八十センチを越え、皆より頭ひとつ背が高い生徒が、麗子に視線を向けた。

「先生。急に具合が悪くなっちゃったよ。保健室に行くから」

ポケットに両手を入れたまま、麗子を見詰めた。

「えっ……。急にどうしたって言うのよ？」

「先生も一緒に来て、介抱して欲しいんだけどな」

五人は一斉に、くすみ笑いを漏らし、麗子の全身を舐め回す様に見詰めた。

「行こうぜ」

五人は、麗子に投げキッスを送りながら、足早に教室を出て行った。教壇には、訳がわからず混乱した麗子が佇んでいた。

程なくして、教室の後ろ側のドアが開けられた。

黒沢龍一が首をすくめるようにして入ってきた。麗子と目が会った。あの一件以来、二週間が経過していた。

二人の視線が一瞬絡み合った。龍一が、ペコリといった感じで頭を下げた。そのまま龍一は、後ろ側の空いている席に座った。近くに座っていた女子生徒が、龍一に微笑みかけながら、ノートを手渡した。中にはぎつしりと、授業内容が書き込まれていた。

「いつも済まない」

ぼそりといった感じで、礼を言った。その女子生徒は、瞳が大きく可憐な顔をしていた。手足がきれいに伸びており美しいプロポーションを持っていた。

「沙織。何。いちやっついてるんだよ」

さつき、麗子に食ってかかった超ミニスカートを穿いた女子生徒の工藤理恵が、湯川沙織を睨み付ける様になった。沙織は俯いて、視線を逸らせた。肩先が微かに震

えていた。

昼休みが始まって間もなく、沙織は理恵に、保健室に呼び出された。保健室に、担当の教師は不在であり、理恵とグループの女子生徒あわせて二人が待ち構えていた。

「沙織。あんた。龍一に気があるんだろう？」

いきなり理恵が沙織の乳房を、制服の上から握り締めた。

「うっ……」

「いい身体しているじゃない。さすが、ミスN校だね」

「止めて……」

消え入りそうな声で懇願した。

「これからなんだよ。お前達。好きにしていよいよ」

理恵が、沙織に猿轡を噛ませ、二人の仲間に押し付け

た。自分は近くの椅子に座った。

「本当にいいの。理恵？」

「私達。ずっとこの娘を狙っていたんだ」

「こんな可愛い顔して、処女だって噂だよ。あんた達で女にしてあげな」

二人はN校で、レズビアンの噂を立てられていた仲であつた。美由紀と彩は、どちらとも背が高く、美しい顔立ちをしていた。美由紀が沙織のセーラー不服の上着を脱がし、彩がスカートを引き摺り降ろした。ブラジャーやパンティを筆り取った。沁み一つ無い白く、瑞々しい裸身が露になった。股間には柔らかそうな恥毛が見えた。

二人は、欲情に濡れた目付きで、沙織の盛り上がった乳房や白い尻を見詰めた。

「美味しそう。涎が出てきたわ。私はオマ＊コを食べるから、彩はお尻を食べて」

「いいよ。ほら、ちゃんとまっすぐに立って、両足を開

くんだよ！」

彩が沙織の桃尻を平手で叩いた。

二人は、沙織を立たせ、前後に膝間付いて、膣や尻の割れ目に顔を押し付けた。すぐにピチャピチャという厭らしい音が聞こえてきた。沙織は身を振じらせるようにして、身悶えしていた。円らな瞳から涙が零れ落ちた。

沙織には、マスターベーション以外の経験は無かったが、二人の執拗で巧みな愛撫に、感じ始めていた。真っ直ぐ立っていられなくなり、美由紀の頭にもたれかかった。二人の舌が、膣やアヌスを這いまわっていた。

「この娘感じているよ」

アヌスを舐めていた彩が、愛液に濡れた顔を上げた。

「そろそろだね」

椅子に座って眺めていた理恵が、バックから、男根部分が三十センチはある巨大なペニスバンドを取り出した。二人は沙織を、簡易ベッドに、仰向けに寝かせた。

理恵が、美由紀にペニスバンドを手渡した。美由紀はスカートとパンティを脱ぎ、ペニスバンドを装着した。理恵が沙織の両手を押さえつけた。彩が中腰になって、沙織のアヌスに指を根元まで差し込んだ。沙織が猿轡の下から呻き声を上げ、背筋を仰げ反らせた。

「これでお前を、私の女にしてあげるからね」

美由紀が、張型の先を沙織の頬に擦り付けた。沙織が憑かれたような視線を向けた。大粒の汗が、額から零れ落ちた。激しく身体を振じらせ逃れようと試みた。理恵の拳が、沙織の鳩尾にのめり込んだ。

「うっ……」

という呻き声を上げ、大人しくなった。

美由紀が勝ち誇ったような笑みを浮かべ、沙織の太腿を押し広げた。サーモンピンクの膺を目で楽しみ、おもむろに口をつけた。音を立てて、膺口をしゃぶり、クリトリスを吸い上げた。彩の残酷な指先が、いつそう激し

く直腸内をかき回した。理恵は、沙織の乳房を口に含み、乳首を舌先で転がした。

暫く、三人による無言の愛撫が続いた。沙織の腰が妖しく蠢き出し、膣からは愛液が零れ落ちた。美由紀は上体を起こし、ペニスバンドに装着した張型を佐織の膣口に押し当てた。他の二人の視線が、張形に集中した。佐織も膣口に異様な気配を感じ、首を持ち上げ、視線を向けた。ほんのりと朱が差していた頬が、一瞬で蒼白になった。

「行くよ」

狭い膣口に張型の先が、ゆつくりと、めり込んで来た。目が眩むような鈍痛が、膣口から全身に走り抜けた。理恵の手の平を掴みながら、黒髪を振り乱し、全身を震わせた。脳がスパークして、真っ白になった。

「失神しちゃったよ」

美由紀が、腰の動きを止めた。

「かまわないさ。早くしなよ。後がつかえているんだから」

彩が催促した。美由紀は意識を失った沙織の乳房を舐めながら、激しく腰をうち振るった。張形が出し入れされる度に、膣口から鮮血が流れ出した。女達は交代で、張形や手や口を使い、失神した沙織の裸身を弄んだ。

「この間はどうも……」

校庭裏の駐車場で、龍一は麗子に声を掛けられた。帰宅のためにバイクに乗るところであった。

「怪我は大丈夫なんですか？」

「あら、随分と丁寧な話し方ね。でも、ぶつきらぼうな方が好きだな」

龍一は、バイクに跨ったまま、麗子を見下ろした。麗子が澄んだ目で微笑みかけた。

「……」

「今度、お礼がしたいわ」

「礼なんて……」

龍一はボソリと、呟くように言った。

「それじゃあ、私の気が済まないのよ」

「……じゃあ。英語を教えてください」

「まあ。優等生ね。でも、貴方、英語は得意じゃないの」

「本場のがいいんだ。先生は、ボストンに留学していたんでしょう？」

龍一が遠くを見るような目つきをした。

「いいわ。どこで？」

「お気に入りの場所があるんだ。日曜日、迎えに行くから……」

龍一は、そう言いながらバイクを発進させた。麗子は、龍一の姿が見えなくなるまで、その場に留まり見送った。

龍一には、ヤクザに犯され悶える姿を見られていた。

裸身のすべでもだ。それに、年下ではあるが、自分に無い何かを感じていた。澄んだ瞳にときより憂いを浮かべる龍一に惹かれ始めていた。

単なる生徒と教師の関係とは思えなかった。反面、底知れぬ泉に飛び込むような不安も覚えていた。

終業を知らせるチャイムで、現実に戻された。校舎が真つ赤な西日の中に浮き上がっていた。

沙織は、美由紀と彩に両側から、支えられるようにして校舎を出た。歩き方に力が無く、空ろな表情をしていた。

「一応、家に電話させた方がいいわよ」

理恵が美由紀に向かって言った。

「沙織の親は煩いという評判よね」

美由紀と彩は、親戚が管理するアパートに共同で部屋

を借りていた。今晩は、そこに沙織を連れ込み、苛め抜くつもりであった。

「たっぷり可愛がってやりな」

恵理は投げキッスをして、三人と分かれた。

美由紀と彩は周囲の目を盗みながら、沙織の胸を触ったり、スカートに手を入れたりした。

アパートは学校から、一キロと離れていなかった。親戚が管理しているとはいえ、ほとんど放任状態だった。

二階にある自宅に沙織を連れ込んだ。入るなり、二人は沙織のセーラー服を剥ぎ取るような勢いで脱がせ、素っ裸にした。

沙織はもはや、何の抵抗も示さなかった。空ろな表情で壁を見詰めていた。

二人は自分達も全裸になって、沙織を浴室に連れ込み、

シャワーで全身を清めた。二人は人形のような佐織の身体を、ボディソープを染み込ませたスポンジで擦りながら、乳房や膣やアヌスを弄んだ。シャワーの後で、二人は沙織を、寝室のダブルベッドに転がした。

「何か、お腹が空かない？」

美由紀が甘えた声を出した。

「確か冷蔵庫にバナナがあっただけど」

彩はそう言いながら、立ち上がりキッチンに消えた。

すぐに戻って来た。意味深な笑みを浮かべ、美由紀に一本のバナナを手渡した。二人は、ベッドの上に仰向けの姿勢で横たわる沙織の太腿を押し広げた。浴室での陵辱のせいか、そこはしつとりと潤んでいた。美由紀が、沙織の膣に皮のついたバナナを差し込み抜き差しした。

「ああ……」

沙織が低い喘ぎ声を上げた。

暫くバナナの注送を加えた後で、美由紀は愛液に塗れ

たバナナを抜き取り、皮を剥き、一口食べた。二口目を口に入れ、彩に口移しで食べさせた。三口目も、同じように沙織に口移しで食べさせた。バナナを口に入れられながら、沙織は一滴の涙を流した。

数分後、二人の女達が、貪るように沙織の乳房や膣に喰らいつき舐め回していた。アヌスに指先を入れられ、かき回された。

第五章 誘拐

日曜日の早朝、麗子は自宅の台所で、二人分の弁当作りに励んでいた。

その時、チャイムが鳴った。龍一との約束の時間まで、一時間もあつた。

「随分と早いわね」

ドアを開けると、パンチパーマをあて、サングラスを

かけたヤクザ風の中年男が佇んでいた。

「お嬢さん。ちょっと顔を貸してくれないか？」

「……どちら様ですか」

言いながら、この前の陵辱のシーンが脳裏を掠めた。

慌てて、ドアを閉めようとしたが、男の片足が割り込んできた。男は、ダークスーツの胸ポケットから、黒光りする拳銃を取り出した。

「大人しくしないと、このオツパイが吹っ飛ぶことになるぜ」

麗子を空いている方の手で、手繰り寄せ乳房に銃身を押し当てた。男は、アパートの周囲に人影が無いことを確認すると、麗子を引きずり出した。

アパート前に止めてあった黒塗りのベンツに押し込んだ。ベンツの後部座席で、ヤクザ風の見知らぬ男達に挟まれ、シャツの上から、乳房を激しい勢いで揉みしだかれた。恐怖のあまり、声を出すことすらできなかった。

男のごつい手が、ミニスカートを捲り上げた。男が血走った目付きで、むっちりとした長い太腿を、見詰めた。パンティの上から、股間を鷲掴みにされた。

「うっ……」

痛みのあまり、呻き声が漏れた。男は荒い息をあげ、麗子を自分の膝の上につ伏せにして、パンティを引き摺り下ろして、深い尻の割れ目に顔を入れてきた。熱い舌先が、膣やアヌスを這いまわっていた。

一時間後、龍一が運転するバイクが、麗子のアパート前に到着した。龍一がチャイムを鳴らしても何の応答も無かった。ドアに鍵はかけられていなかった。

ドアを開けてみると、靴が見当たらなかった。外出でもしているのだろうかと思い、バイクのところに戻った。それから半日待っても麗子は、戻らなかった。

龍一は首を横に振り、頭を搔いて「チェッ」と呟いた。

ヘルメットを被り、バイクを荒々しくスタートさせた。

浚われてから十五分後、麗子は、熊井組事務所の二階に連れ込まれた。パンチパーマやスキンヘッドの組員達に取り囲まれた。後ろ手を縛られたまま床に転がされた。

皆の暗く濡れた視線が、麗子の盛り上がった胸やミニスカートからはみ出した太腿に集中していた。麗子は、激しい恐怖感とともに、尿意を覚えていた。悪寒がとどめなく、全身を走り抜けていた。

「兄貴。こいつは上玉ですぜ！」

「ああ。最高の玉だな。高く売れるぞ」

「その前にシャブ漬けにして、犯りまくりましょうよ」

「安。あれを持ってこいや。それから野郎どもは女を、素っ裸に剥くんのだ！」

その場にいた組員の中で、幹部と思われる男が、皆に

命令した。組員の男達が麗子に群がった。何本もの手が伸びてきて、シャツを引き裂かれ、ミニスカートを抜き取られた。ブラジャーを筆り取られ、パンティを破られた。

「見ろや。このオッパイ」

男が麗子の横にしゃがみ込んで、重たげな乳房を鷲掴みにした。

「止めて。お願い……」

「いい声で泣きやがるぜ」

男が麗子の口に吸い付いてきた。舌を吸出され、存分に吸われた。むっちりとした太腿を押し開かれた。男の熱い吐息を感じた。すぐに熱い舌が膣に差し込まれた。

周りで見ていた組員達は、皆、ズボンとパンツを脱ぎ、己が男根を扱っていた。男達はかわるがわる舌や手を使って、麗子の乳房や膣やアヌスを弄んだ。巧みな愛撫に恐怖感は薄れ、暗い欲情が湧きあがってきた。

皆がひととおおり、口や手で楽しんだ後で、麗子はテーブルの上に座らされた。そのまま、仰向けに寝かされ、太腿を大きく広げられた。サーモンピンク色の膣が剥き出しにされた。

「姉ちゃんのお蔭で、子分の益田は病院で呻いているんだ。落とし前をつけてもらわないとな」

男が、自分の指先を舐め、白い薬品を塗りつけ、麗子の膣に差し込みかき回した。

「うっ……」

指を抜き、また、白い粉を塗り今度はアヌスに差込んだ。

「ああ……」

その瞬間に、燃え上がるような熱い疼きが、股間から湧き上がった。自然に腰が動いていた。

「そんなにいいのか？」

男は麗子の股間に顔を押し付け、膣やクリトリスを舐

め回した。存分に楽しんだ後で、真珠を埋め込んだ男根を膣に突き入れた。

「最高の締めまり具合だ。この姉ちゃん。顔や身体だけじゃなくここの造りも絶品だぜ」

男が呻くように言った。

「ああ……。いい……」

膣とアヌスに塗り込まれた薬のせいもあって、麗子は訳がわからなくなっていた。喘ぎ声をあげながら、男の股間に手を差し入れて、睾丸を手の平で弄び、腰を淫らに動かした。他の男たちも、堪えきれずに麗子の裸身に手を伸ばした。

乳房を揉みしだく者、麗子の口をこじ開け、男根を差し込む者、皆、麗子の白い裸身から爛れるような快感を得ようとした。

それから、何人もの男達によつて膣やアヌスを貫かれた。顎が外れるくらい多くの男根をしゃぶらされた。何

度も失神し、その度に冷水を浴びせられ目を覚まされた。麗子の全身に注がれた精液が、異臭を放ち出すと、シヤワー室に運び込まれ、男達によつて全身を洗い清められた。それを三日三晩続けられた。食事のときも、臆やアヌスを犯され続けた。男根を口に含みながらの排泄を強いられた。麗子は、男達によつて数え切れないほど逝かされていた。反抗心を完全に抜き取られ、為すがままの状態になっていた。

四日目の朝、目覚めてすぐに、スキンヘッドのいかつい組員の肩にのせられ、シヤワー室に運び込まれた。そこには、二十代前半に見える全裸の女が待っていた。女は瞳が大きく愛くるしい顔をしていた。乳房も大きくはちきれんばかりであった。女によつて、床に寝かされ、精液に塗れた全身を洗い清められた。

股間にボディソープを塗られ、安全カミソリで恥毛を

剃り落とされた。

「あんた。きれいなね」

女は麗子の股間を、手の平に付けたボディソープで洗いながら、耳元で囁くように言った。

「……」

「あんたはね、近々ロシア人に買われるそうよ。私ね。

若頭の女なの。何でも教えて貰えるのよ」

自慢げに笑った。指先を麗子の臍とアヌスに差し込み、かき回した。

「うつ……」

女は同性のみが知り得る壺を心得ていた。

「私ね。男に抱かれるのは好きだけど。あんたみたいにきれいな女を抱くのも大好き。痺れちゃうのよ。このオマ*コの感触に……」

「お願い。助けて下さい……」

「無理だよ。もう買い手が来ている筈よ。あんたはロス

ケに買われて、死ぬまで、でかいチ*ポで犯りまくられるのさ」

「ああ……」

女の指の動きが激しくなった。白魚のような指先が、麗子の膣や直腸内で蠢いていた。女が、両手を動かしながら、身体を傾けてきて麗子の乳首を口に含んだ。舌先を微妙に震わせ乳首を刺激した。

「ああ。いいい……。逝く。いっちゃう！」

麗子は、女に抱かれながら、全身を仰け反らせるようにして果てた。

「姉さん。そろそろ時間ですよ」

シャワールームのドアが開けられた。戸口に先ほどのスキンヘッドの男が立っていた。

「何だよ！安。いいところなのに」

「親分の言いつけなんですよ」

女に安と呼ばれた男は、首をすくめるように言った。

「親分の言いつけとあっちゃや仕方ないね。姉ちゃん。愉しかったよ。アリガトサン」

安は床に横たわり、荒い息をしている麗子を肩に担ぎ上げた。

「これは美しい」

麗子は、素っ裸で組事務所のソファテーブルに横たえられていた。すぐ近くに青い目をした白人の男が座り、麗子の全身を舐めるように見詰めていた。

男は中年ぐらいの年格好で、がっちりとした逞しい身体をダークスーツに包んでいた。

「トカレフ五丁に、タラバガニ三百キロでどうだ？」

白人男と向かい合う席に座っていた中年男が、口を開いた。男は髪をオールバックにまとめ、シャツにスラックスという姿だった。麗子の陵辱にも加わっていた男だ。

「相変わらず、組長は商売上手だな。かなわないよ」

白人男は、腕組をして流暢な日本語で答えた。

「この女なら、モスクワで人気者になるぞ。たっぷり稼いでくれる筈だ」

組長が身体を乗り出して、麗子の脂がのった尻を鷲掴みにした。

「秘密クラブに売った方が、利益がでますよ」

白人男は麗子の乳房を、掴み感触を楽しむように握り締めた。

「秘密クラブ？」

「上流階級向けのSMクラブですよ」

「どうしても好きにしたらいい。生かすも殺すも自由だ」

「そうですね。二十四時間鬪り者です。狂ったら、豚の餌にします。それもショーなんです。生きたまま、豚舎に投げ込むんですよ。豚達には三日三晩餌を与えていないから、ブーブー鳴きながら狂ったように女に喰いつ

き、貪り喰うんです。女のオツパイや尻が食われる様子は刺激的ですよ」

「この女の肉なら、豚も泣いて喜ぶだろうな。で、その豚はどうするんだ？」

「メンバーで食します。まったりとして、美味しいということですよ。これって間接ですよ。そうだ。そろそろ身体検査をしたいんですけど」

「どうぞ。気の済むまでやればいい」

白人男は、テーブルの前に膝間付いて、麗子の太腿を持ち上げ、大きく開いた。剃毛され剥き出しとなった膺やアヌスが見えた。

「フーム……。美しい。きれいなピンク色をしている。

あまり使い込んではいないようだ」

白人男は感心したように独り言を言った。麗子の股間に鼻先を押し込み、匂いを嗅いだ。

「石鹸の匂いに中に感じる、女の匂いがたまらないな」

思わず舐め回していた。

「うっ……」

麗子は目を閉じ、必死に耐えていた。その表情を楽しみながら、膣内に熱い舌先を入れ、アヌスを指先で犯した。

暫くそうしていると、耐え切れなくなったのか麗子が、白人男の顔を太腿で挟み込むようにして、腰を上下に動かし、股間を顔に擦り付けて来た。

組長が横から、血走った視線を向けていた。白人男が、激しく舌先を使い、アヌスに二本の指を差し込んでかき回した。

「ああ……。いい……いい……」

麗子が激しく全身を震わせて果てた。

「トカレフ五丁にタラバガニ三百キロ、それに弾丸五百発をサービスしときますよ」

白人男が麗子の愛液に塗れた顔を上げた。

「交渉成立だな。三日後に引き渡す。物と交換だ」

「あんまり可愛がらないで下さいよ」

ロシア人は、名残惜しそうに麗子から離れた。

龍一は四日間、学校を休んでいた。特別な理由は無かった。あるとすれば麗子とのことぐらいだろうか。麗子と顔を合わせるのが億劫な気がしていた。

五日ぶりに遅刻しながらも登校した。麗子の授業の筈であったが、姿が見えなかった。黒板には自習時間と書かれていた。生徒達は、教科書を広げるわけでも無く、意味の無い雑談を際限無く続けていた。

「先生は来ないよ」

気がつくくと、横から理恵が龍一の顔を覗き込んでいた。

「あんな年増ほつといて、私と付き合わない？」

「病気か何かか？」

「あんた。本当に惚れているんだ」

「お前には関係ない」

ボソリという感じで言った。

「何さ。カツコつけちゃって！少しばかりカツコいいからって図に乗るんじゃないよ」

それまで、雑談で盛り上がっていた教室が、急に静かになった。二人の会話に聞き耳を立てていた。不意に龍一は立ち上がった。理恵が、仰け反るように後去った。龍一は、鞆を片手で肩にかけ、席を離れた。そのまま、教室を後にした。

組事務所の二階事務室では、麗子が素っ裸にされて、椅子に座った組員に背後から抱き抱えられていた。衣服を着た組員に、臈を男根で貫かれ、重たげな乳房を揉みしだかれていた。黒々とした男根が麗子の臈に出入れ

され、くちゆくちゆと嫌らしい音を立てていた。麗子は両手両足を前に投げ出すようにしていた。葉を打たれているのか、ぼんやりとした表情で天井を眺めていた。

二人の手前では、組員達が麻雀卓を囲んでいた。室内は、タバコの煙で息苦しいほどだった。

「安。そろそろ交代しようぜ」

麻雀をしていた組員が、安に声をかけた。

「いいぜ。俺も打ちたくなつた」

安は、麗子をソファテーブルに、うつ伏せに横たえ麻雀卓に付いた。先ほどの男が、麗子の盛り上がった尻の割れ目に顔を埋め、アヌスを舐め始めた。

存分に楽しんだ後で、盛り上がった尻を抱き、真珠を埋め込んだ男根で貫いた。

「クウー……。何度抱いてもいいね。たまらないぜ。この締め具合が」

男は思わず呻き声をあげていた。

「ちえっ。見せつけやがるぜ」

近くのソファでエロ本を読んでいた男が、立ち上がり二人を結合したまま立たせた。

「工藤。オマ＊コあけてくれないか」

「兄貴。そりやないですぜ」

「お前は、後ろの穴を使いな」

工藤と呼ばれた男が、立ったまま、膣から男根を抜き、唾を塗り込んだアヌスに挿入した。もう一人の男が、前から麗子を抱き、男根を膣に差し込んだ。

男達は前後から麗子をサンドイッチにして激しく腰を動かした。前から麗子を抱いていた男が、口に吸い付き唾液を激しい勢いで吸った。歯とは歯が触れ合い小さな音を立てていた。葉のせいで麗子は逝きまくった。男たちに抱き抱えられ、宙に浮いたまま、黒髪を振り乱し、喘ぎ声をあげ続けた。

「ギャー！」

その時、一階の事務所から男の絶叫が聞こえてきた。

「出入りか？」

麗子を弄んでいた男達が、動きを止めた。

「おい。安。様子を見てこいや」

「俺ひとりですか？」

「早く行かんかい！」

怒声を浴びて、安はのろのろと立ち上がった。年配の組員が懐からロシア製自動拳銃のトカレフを取り出して、安に手渡した。安は額の汗を手の甲で拭きながら、階段を下りていった。

一階事務室のドアのところ、安が聞き耳を立てていた。物音は何もなかった。事務室には、組員が五人はいる筈であった。安はトカレフを右手に構え、左手で恐る恐るノブを回した。むっとするような強烈な血匂が鼻をついた。照明は消えており何も見えなかった。冷や汗が、脇の下を流れるのを感じていた。手探りで壁のスイ

ツチを押した。目の前に血塗れの組員達が、倒れていた。喉を切り裂かれ、手足をもぎ取られていた。同じような死体が、床に散乱していた。一面血の海となっていた。

「兄貴！」

安は絶叫を上げながらその場に座り込んでしまった。

バタバタと階段を降りてくる音が聞こえた。

「何だこりゃ！」

日本刀を持った幹部クラスの組員が、その場に凍り付いていた。二階にいた六人の組員全員が、呆然とした表情で立ち尽くしていた。その時、天井から一滴の液体が、安のスキンヘッドに零れ落ちた。

「何……」

安がスキンヘッドを撫でた手の平を見詰めた。べつとりとした血で汚れていた。恐る恐る天井を見上げた。そこには、目を爛々と輝かせた龍一が天井に張り付いていた。目と目が合った。絶叫を上げながら、トカレフを構

えた。乾いた銃声とともに、龍一の身体が、安を押しつぶすように舞い降りてきた。拳銃を持っていた腕を、蹴り上げられた。衝撃で腕が根元で折れた。疾風が聞こえ、顔面に正拳を見舞われた。安は自分の頭蓋骨が砕けるのを聞きながら絶命した。

龍一の動きは速く、陽炎のように組員達に襲い掛かった。常人の目では、追うことができなかった。ある組員は、手刀で喉を突き破られ、強烈な前蹴りで内臓を破壊された。手足をおもむろにもぎ取られる者もいた。龍一は一匹の悪魔と化していた。一瞬後、組員達は全員絶命していた。

龍一は、完膚無いまま、破壊された死体の中に呆然とした表情で立ち尽くしていた。辺りは血の海となっていた。着ていたTシャツは血に塗れていた。

口内に濃い血の味が残っていた。急に吐き気を覚えた。前のめりになって、吸ったばかりの血を吐いた。直に血

を吸ったことは初めての経験だった。これまでは父から、定期的に輸血を受けていた。龍一は嘔吐感に苛まれながら、これまでのことを思い出していた。麗子が学校を休んでいることを知った龍一は、その足で麗子のアパートに向かった。五日前と同じく、ドアに鍵はかかっていた。室何にも麗子の姿は無かった。常人より数万倍の嗅覚を持つ龍一には、数日間麗子が家を空けていることがわかった。鍵もかけず、数日間も家を空けるなどということは、通常では考えられなかった。不意に麗子との出会いを思い出した。ヤクザ者に犯されていた麗子の白い肢体が蘇った。急に心臓が高鳴り出した。龍一はこれまで感じたことが無いような激しい怒りを覚えていた。

気がつくくと、町の中心部にある熊谷組事務所を目指し、バイクを走らせていた。組事務所から数百メートル離れた地点でバイクを止め、学生服の上着を畳んで荷台に置

いた。すぐ近くに建っていた三階立てビルの屋上を見上げた。

助走無しで、六メートルの高さまで、一気に飛び上がった。それから郵便局やスーパーの屋上を伝い、数百メートルの距離を疾風のように駆け抜けた。

誰の目にもとめられなかった。たとえ、誰かに見られたとしても、目撃者は己が目を信じられなかっただろう。建物から建物まで十メートルの距離を軽々と飛び越え、差し渡し数十メートルの屋上も数歩で走破していた。

一分もかからず、熊谷組事務所ビルにたどり着いた。屋上から内部への入り口は無かったので、地上に飛び降りた。

組事務所のドアを開け、恫喝してくる組員に麗子のことを尋ねた。後は勝手に身体が動いていた。それから先はあまり覚えていなかった。不意に龍一は、誰かの気配を感じ、振り返った。全裸姿の麗子がドアのところで佇

んでいた。

うつろな視線を、少しの間、床で血塗れとなって絶命している男達の姿に向けていた。そして龍一の方を見た。目と目が合った。

「りゅ……。龍一君」

「……」

その時、けたたましいサイレンの音が聞こえてきた。

龍一は咄嗟に麗子を抱え上げ、階段を駆け上がった。

三階の窓から下を見下ろすと、数台のパトカーが止まっていた。銃声を聞いた付近の住民が通報したものと思われる。

反対方向に向かって、麗子を抱いたまま駆けた。反対側の部屋で、窓のカーテンを使って紐を作り、麗子を背負い紐で固定した。その部屋の窓から、這い出して、壁を攀じ登った。手掛かりは無かったが、タイルの隙間に埋められた充填剤を指先で押しつぶして、足場を確保し

た。麗子は龍一の胸に顔を埋め、目を閉じていた。

屋上に出て、十メートルは離れているビルの屋上に飛び移った。その屋上に干してあった洗濯物の中からジーンズと二枚のTシャツを失敬した。空ろな表情をした麗子にジーンズを穿かせ、Tシャツを着せた。自分も血塗れのシャツを脱ぎ捨て着替えた。それから、麗子を抱き上げ、バイクを止めてあった方角に、ビルの屋上を伝いながら向かって行った。

第六章 予兆 へと続く